

緑日本の幸せな未来

日曜日夜 11 時半…

もうこんな時間だと、壁にかけてある時計を見た私は思った。明日は月曜日だ。仕事だけしか思い浮かべない日なんだ。なんだかつまらない。私は、電気を消し、目を閉じた。

と、その時、部屋のどこかにいきなりの光が…まぶしい。もう朝になったのか。もう少しだけ寝させてと、ブツブツしながら、私は布団で顔を隠した。だが、…

「起きて！起きて！」

「なによ？今寝てるよ。」と私は目を閉じたまま誰かさんに言った。

誰かさん？！あれ、一人暮らしなのに…大変！侵入された。私、ベッドから飛び出し、大きい声で「助けて！助けて！」と叫んだ。

「あ、静かにして！僕だよ！」

「僕」。男の人だ。いけない。危ない。しかし、私はもう足指まで凍えてしまった。テーブルの引き出しからのまぶしい光で、背が低く、丸い頭の「男」の姿が見えた。意外と怖くない感じだ。

「だから、僕、ドラえもんだよ。」

「ドラえもん？」そんなわけがない。きっと誰かのいたずらだ。ドラえもんなんて、ただ漫画の人物に過ぎない。私、今までもない勇気を出し、電気をつけた。そして、まずはっきり見えたのは、引き出しの前に立っている丸くて、青い「ドラえもん」だ。顔、色、身長まで漫画のドラえもんとそっくりだ。

「でも…でも…あなた、本当にドラえもん？」

「フフ、やっぱり信じてくれないね。だったら証拠を見せよう。」

「証拠？」

「引き出しにあるのはタイムマシンだよん。今から未来の世界に連れてあげるね。」

「えっ」驚きすぎた私、何を言えばいいか分からなくなってしまった。

「さあ、早く着替えして行きましょう！」楽しみの声で言ったドラえもん。

多分今まで 23 年生きてきて、それが一番不思議な体験だった。私は、いつものテーブルの引き出しに入った。そこにドラえもんが待っていた。

「じゃあ、いつの世界へ行きたいの」とドラえもんが聞いた。

いつでいいのかな。過去か未来か。しかし…

「いつより、今とても行きたい場所があるのよ。」

「だったら最初から言ってよ。どこでもドアを出してあげるから。じゃあ、どこに行きたい？」

「うーんとね、国立競技場なんだけど…」

「何だと。国立競技場か。まあ別に行きたければ連れてやるけど。ああ、でも国立競技場は、今建て直されている途中なので、やっぱ 2020 年の国立競技場へ行こう。」

2020 年、つまり、東京オリンピックの年なんだ。最初の怖さをさっぱり飛ばせた私は、ド

キドキしながら、時の流れで2020年の東京へ行っていた。

「ねチャムちゃん、ちょっと聞いていい？」

「うん。」ドラえもんが私の名前を知っている理由なんて、言うまでもないことだ。ドラえもんだからこそ。

「君は、外国人として、将来どんな日本を見たいの？つまり、世界の日本への期待は何？」

それはかなり難しい質問だ。世界の人々は、日本に何を期待しているのか。私、ただその70億人の一人だけだ。しかし、ちゃんと考えて答えた。

「日本といえば、緑の国だと思ひ浮かぶ。国民も政府も緑を大切にしているし、企業も環境を守るために色々なアイデアと技術を発明してきた。日本のエコテクノロジーは世界のトップになった。特に、今の地球温暖化の中、日本の努力は世界に大きく貢献できたと思っている。それで、やはり未来もそれらの技術を更に活かし、また、新しいエコ技術を発明してほしい。緑の日本だけではなく、緑の世界になったら一番良いことだと思うよ。」

「そうか。やっぱり今いろんな国は、経済を発展させるため緑を捨ててきたよね。でもそのままじゃ、将来どんなにお金持ちになっても、おいしい空気やきれいなお水、毒質のない食べ物は手にいられなくなっちゃうんだ。その時どんなに後悔してももう手遅れたんだね。まあ、その話は後にして。さて、ここが6年後の日本だよん。」かわいい笑顔のドラえもんに言われた。

ここは日本か。私は、日本へ来たこともあるが、6年後日本はこんなに変わったとは、想像にもつかない。町はどこにでも緑でいっぱいになり、歩道は前より広くされて、その歩道にそって大きい桜の木が植えてあるのだ。そして、…

「ドラえもん、それらの木の上にあるものって…」

「あ、風力発電タービンだよん。東日本大震災による福島原発事故の後、原子電気はもう使われないんだ。今は水力、風力、ソーラーなど、安全で環境にやさしいのを使うようになった。ほら、あれを見てごらん。」

「あれ、ただの車だけじゃない。」

「ううん、あれは車なんだけど、ガソリンや電気で走るのではないよ。水と空気で動く車なんだ。廃棄を出さず、しかも資源の節約で、今みんなに使われるの。日本のその車は世界の各国にどんどん輸出されてるんだ。それと、このスーパーのクーラーを見て。普通のクーラーだと思っているだろう。本当は、クーラーも冷蔵庫などの電気製品は、もう二酸化炭素製品になったの。」

「ということは…」

「二酸化炭素で動くなんだ。ほら、植物も二酸化炭素で生き、酸素を出すだろう。クーラーも冷蔵庫なども同じようになったということだ。だから、日本は前ほど電気に依存しないようになり、原子力発電所を停止させたわけだ。それが、震災復興の最も重大な一歩だったよ。」

「なるほど。震災復興と言えば建物を建て直したり、新しい会社や工場を作って仕事を提供したりすると考えたが、…」

「エネルギーが足りなければ復興も早くできないものだね。その上、どうやって人に仕事を提供できると思うの？それは、今までもない新しい職業ではなければならない。新しい工業で新しい技術を持っているから、より人材が必要となったんだ。それは、…あーあ、また何よのび太

くん？」

ある小学生の登場で私がびっくりした。その男子小学生はドラえもんに行った。

「二人とも、難しい話はやめよう。もうすぐオリンピック開会式だよ。早く行かないと。」

それで、私たち3人は国立競技場に向かっていった。しかし、私はたくさんの考えを抱え、耐えられずドラえもん聞いてしまった。

「しかし今までの話もまだ徹底的な方法ではないと考えられるけど」

「じゃあどこが問題？」のび太の「またか」を聞こえないふりして聞き返したドラえもん。

「確かに日本は少子化で人材不足になったが、もしそれ解決できないとかなり大きな問題になるにちがいない。」

「うん。そうだね。じゃあもう一度見てごらん。」

国立競技場には半分以上が子供なのだ。それだけでなく、街のあっちこっちにも子供がおおぜいいて、とても明るくて幸せな風景だ。

「なんで…」私、途中で突然何を言っていていいか分からなくなった。

「説明してあげよう。2013年日本の出生率は1.43（厚生労働省統計）で、少子化が深刻な問題になった。しかし、6年間の努力で、今の出生率は2.1なんだよ。」

「ベトナムと同じだ。どうやってそんなに向上できたの？産休制度を長くしたのか、子供手当を高くしたのか。」

「それは2014年も実施したが、効果はなかなか出なかったじゃない。」

「…」

「日本人は子供がほしくない理由は、女性が大変で、お金が足りない、…とか、色々聞いたよね。でも、僕の考えでは、ただ子供がほしくなっただけなんだ。日本はベトナムより余裕な国なのに、また、ベトナムには男性産休制度もないのに、なぜベトナムの方は子供が多いのか。つまり、問題はお金でも産休制度でもない。」

「不思議だね、ベトナムの田舎は今でも一家族に4、5人以上の子供もいるよ。なぜなら、彼らは「子供が宝物。子供が出来て、今は大変だが、将来はたくさん助けてくれるはず」と考えているから。ああ…なるほど！」

「そうだろう。本当の問題は、人の考えなんだ。日本は逆に、子供が出来たら、お金が無くなり、社会に出られない、生活が大変だという考えで、ますます子供がほしくなくなってきたと僕は思うよ。だから、もし人の考えを変えれば、問題はほどけるのだ。もちろん人の考えを変えるのは簡単ではないが、最初は、中学生からベビーシスターという部活動を行い、その活動に政府が支援すればきっと参加者が出る。少しのお小遣いで参加する人もいるし、好きな人に自分の女らしさをアピールだけで参加する人も大勢いるかもしれないが、長い間の活動で、人と人と同じように、きっと赤ちゃんとの深い関係ができるはずなんだ。そして、それらの人たちもきっと子供がほしくなるよ。」

「そうか。それで日本人の少子化問題が解決できたのか…」

のび太の突然出した大きい声が私の考えを切れた。

「ほらみんな！花火！！」

国立競技場から花火が放されて夜空を輝かせた。東京オリンピック 2020 年が始まった。

「花火きれい。ね、ドラえもん、今の発展している日本を見てとても嬉しいけど、経済の発展で花火やお祭りなどを守ってきた日本のことが一番好きなんだ。」

私の言葉を聞いたドラえもんは、周りに立っている浴衣を着た子供たちを見て、こう言った。

「そうだね。今夜多くの子供が発展している日本の伝統的な文化を見ているんだ。これが日本の未来なんだよ。彼らとのオリンピックは、何よりも明るいオリンピックだね。」

私は、きれいな花火の光で、何も言えなくなった。まぶしい。花火の光は眩しすぎだ。少し目を閉じてまた開けた私は、昨夜のように、ベッドにいたままだ。窓から太陽の光が照らしていた。もう月曜日の朝になった。

仕事に出かける前に、ニュースを見た。まずは…

「厚生労働省の統計で、今年度日本の合計特殊出生率は昨年より高くなり、1.43 に至りました。これは日本の社会と経済にとって非常に良い気配です。次は、花見のニュースです…」

もう時間になったので、私はテレビを消し、出かけた。

「本当にただの夢だったのか。」

突然大好きな言葉を思い浮かんだ。「夢は見るためにあるんじゃないくて、叶えるためにあるんだ。」

ちょうどその時、近くの幼稚園のバスが通り、バスに乗っている子供たちが私に手を振ってくれた。

「子供が幸せな未来。いいメッセージだったよね。」

その日の朝はとても晴れた朝だった。